

# ケアマネの出会った 家族たち

## 8

### ～家族理解と家族支援～

#### 木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

#### ～自分でデザインする～

私たちは、日々の暮らしの中で、小さなことから大きなことまで、選択と決定の繰り返しです。そして、自分で決めたことに、ある時は後悔をすることもあってしょう。そんな悔しい思いも含めて人生という長い道のりを歩いていくことで「自分らしさ」というものが出来上がるのかもしれない。そして、人はどんな状態になっても、できる限り、自分のことは自分で考え、迷ったとしても自分で選択し決定していく力も備わっているのしょう。そこには、できることなら、誰かに頼り遠慮しながらの生活ではなく、少しぐらい不便や不自由があっても、自分の力で生きていきたいという思いも当然ながらあるのだと思います。

自分の生き方を自分でデザインする。そこに生きている意味や価値が生まれるのしょう。そう

やって、自分で選び決定した生き方をほかの誰かに何か言われる必要もないのだろうなと思います。

#### ～福ちゃんと一緒に～

茂さんは87歳です。末期癌で予後は3か月程度。春までその命は続くかどうか、と医師から説明を受けたのは、雪が降り積もり始めた12月でした。そうであれば、残り時間は住み慣れた自宅に戻りたい、という強い気持ちで奥さんの待つ自宅へ退院しました。高齢夫婦の二人暮らし。今後の病状経過はどうなることか、心配なこともあろうかと、退院前に病院の医療ソーシャルワーカーから、茂さんの地域のケアマネジャーへ連絡が入っていました。

連絡を受けたケアマネジャーは、「退院前の調整など不要」と早急に自宅へ戻ってしまった茂さん

の自宅へ訪問しました。

茂さんの病状は落ち着いています。体の痛みもなく穏やかに過ごしているようです。けれども、また症状が悪化することは十分予測できることでした。ケアマネジャーは、茂さんと奥さんのチョさんに現在の生活で不安なことや困りごと、解消したいことなどを確認します。茂さんからは「特に困ることはない。強いて言えば、布団を敷いて寝ているけれど、起き上がるのも立ち上がるのもとても辛いから、病院のベッドのようなものがあるといいな。」と話されました。介護保険では、特殊寝台の利用が可能です。その説明をするとすぐに利用の希望がありました。そして、退院時に勧められていた、訪問看護の利用についても説明をしましたが、こちらについては「看護師さんに来てもらっても、特にしてもらえないから必要ないな。家のことも、ばあさん（チョさん）がいるから困らないし。ベッドだけ貸してもらえればそれでいいよ。」と話されました。ケアマネジャーは、いずれサービスの利用は増えるだろうけれど、現時点では、茂さんが考えイメージしている生活を送っていただくこと、サービス利用はベッドレンタルのみで支援計画をたてました。けれども、家事全般をこなしながら、茂さんの入浴の介助や通院の介助をチョさんが一人で行うことには、チョさんの負担も大きいのではないかとということも、今後の要検討事項としていました。

さて、茂さんの生活は年越しを迎える前に急激な悪化を見せました。夜中に状態の悪化があつて救急搬送されては病院で一時的な治療をして自宅に戻る、ということが短期間に何度か繰り返されました。その度に、自宅での療養には訪問看護が望ましいことを医師から説明されても茂さんはそれを望みませんでした。「あのね、あんた達は、すぐにあのサービスを使え、このサービスを使えっていうけどね、人の世話になることがどれだけ辛いことかわかるかい？人の世話になるということ

は、ある面で自分を抑えなくちゃいけないんだ。もうこの年だからね、死んでもいいんだよ。どうせ死ぬなら、家で死にたいし、よそ様の世話になって、自分の家にも窮屈な思いで死んでいくのはごめんだよ。心配してくれるのはわかるけど、こんな風に調子悪くなることを繰り返しながら、死んでいくことにも覚悟はできているよ。」茂さんは静かに話しました。チョさんは黙って聴いています。特に茂さんの発言に反論することはありませんが、その表情は疲れが滲んでいます。

ケアマネジャーが、時々時間を変えて夫婦の元へ訪問を続けていたある日のことでした。珍しく夕方遅い時間に訪問してみたのです。丁度、チョさんが夕飯の支度を終える午後6時ころです。一日の疲れが出るころだろうと思って訪問しました。すると、既に食卓に座って食事をするところでした。そして、そこには夫婦の他に、初老と言ってもいいような男性が座って一緒に食事をしようとしていました。

「こんばんは。お食事時にすみません。お客様もいらしたのですね。タイミングが悪いようですので、また改めて伺いますね。」と言って玄関先で失礼しようとしたのですが、いつになく機嫌も体調も良い茂さんが言いました。「ろくなものはないが、ばあさんの漬物があるから、ちょっと食べていきなさい。旨いから。」と手招きしてくれました。ケアマネジャーは、この夕食時に親しげに食卓を囲む初老の男性のことや、食卓にどのようなものが並んでいるのかも気になって、勧められるまま同じテーブルにつきました。それは、野菜が中心の懐かしい和食が並んだ食卓です。

「お客様がいらしているのに、お邪魔してすみません。でも、野菜がたくさん並んでいるお食事ですね。とても美味しそうです。」と言うと、茂さんは言いました。

「これは、夏にうちの畑で作った野菜だよ。それからね、これは、福ちゃん。お客じゃなくて、

家にいるんだよ、一緒に。」と言った。ケアマネジャーは不思議でした。茂さんは夫婦二人暮らしと聞いていたし、今までこの福ちゃんという人には会ったこともありません。福ちゃんというその人は、食事を終えると、「ごちそうさま」と言ってその場を離れ二階へと階段を上っていった。チヨさんは、福ちゃんが二階へ上がったことを確認するとおもむろに話し出しました。

「あの子はね、まあ、あの子って言ってももう65になるんですけどね。15の時から家で預かっているんですよ。あの子の家が子沢山でね。昔で言うと‘口減らし’に家へ預けたんです。だけど、あの子は学校へ行っても読み書きはできないし、言葉も話さないから友達もできないし、小学校は3年生くらいまでしか通っていなかったですよ。それでも、家は農家だから、なんだかんだと、父さんが一緒に動きながら働きましたよ。そしたらね、福ちゃんは自分で考えて仕事することはできないけれど、言われたことは実にきちんとできる子でね。教え方さえきちんとしていれば、見よう見まねで畑の仕事はすぐに覚えたのですよ。だから、あの15歳の時に家に来てから、そう10年くらい前かな？農家を辞める時まで、父さんと福ちゃんは一緒に仕事をしていましたよ。」と教えてくれました。

「では、今はどうなさっているのですか？」ケアマネジャーが尋ねました。今度は、茂さんが答えます。

「今はね、近所の私の知り合いの工場で、日中は雑用をさせてもらっているよ。夕方仕事を終えて帰ってくる。体が丈夫だから、何か仕事をさせておいた方がいいみたいだからね。」

ケアマネジャーは、夫婦が長年の時を、福ちゃんと過ごしてきたことを、今、初めて知りました。そして、なぜこれまで福ちゃんの存在は知らされなかったのだろうと考えてみました。もしかすると、福ちゃんの個性は、当時の世の中に受け入れ

られるのは難しく、そんな世の中から福ちゃんを守るかのようにあまり知られないように過ごしてきたのかもしれませんが。

茂さんの状態は少しずつ良からぬ方へ変化していきました。ベッドから起き上がることも少なくなりました。入浴や、トイレへ移動することが随分と体の負担となり、また付き添う奥さんの負担にもなってきました。

ケアマネジャーは、サービスの提案をしますが、やはり最初の頃と同じように茂さんはサービス利用を受け入れませんでした。「このままでは、奥さんも体を壊してしまうかもしれません。茂さん、どなたに力を貸してもらうことが、茂さんにとって気持ちの負担が少ないでしょうか？」と確認しました。すると、茂さんは「福ちゃんだ。福ちゃんなら、力もあるし、気心が知れている。自分の子供のようなだからね。」と言った。

ケアマネジャーは、福ちゃんにも茂さんの介護を担ってもらうことを提案しました。チヨさんとケアマネジャーとで、福ちゃんに入浴介助の方法や、移動介助の方法を伝えました。福ちゃんは、言われた通り手順を覚え、体の丈夫な男性としてすぐにチヨさんのしていた介護を担えるようになったのです。チヨさんは、そんな福ちゃんを心強く感じていました。茂さんも、ベッドサイドへ福ちゃんをよく呼び寄せるようになりました。

気がつけば春も過ぎ6月、初夏です。茂さんは、今では、歩くときには福ちゃんに片側をしっかりと支えられなければ歩けないほどに足も弱ってしまいました。けれども、部屋の窓から見える畑を眺めるのが楽しみです。日中は、窓から畑仕事をしている福ちゃんの姿を目で追いながら、自分が傍にいらなくても、畑仕事だけは福ちゃんが一人でできるようになったことを、自慢していました。

ある日のことでした。天気の良いその日、チヨさんは近所まで用事を足しに出かけました。茂さんは、福ちゃんを呼び寄せ、自分を畑に連れてい

くように言いました。福ちゃんは、茂さんをしつかりと支え畑に出ました。茂さんは、イチゴの植わっているところまで、福ちゃんとゆっくり歩きました。そして、地べたに腰を下ろすと、きれいに実のついたイチゴを一つづ一つづ丁寧にもぎ取りました。

「福ちゃん、この、かごいっぱいイチゴをとるから、ばあさんに食べさせてやってくれな。ばあさんは、イチゴが好きだから。」そう言ってすぐに、かごはイチゴでいっぱいになりました。茂さんは、福ちゃんにイチゴの入ったかごを家の中に持って行くように言いつけました。それを家に置いてから自分の元へ戻ってきてくれるように頼むと、福ちゃんの姿が見えなくなりました。そして、ゆっくりと自分で立ちあがろうとしました。茂さんが、ようやく立ち上がると、2, 3歩足を踏み出したところで、倒れてしまいました。

福ちゃんが、畑に戻ってくると、倒れている茂さんを見つけ「おいちゃん、おいちゃん！」と大声で叫びます。けれども、茂さんは返事をしません。そこへ、帰宅したチョさんが慌てて駆け寄りますが、応答のない茂さん。救急車が来ると、病院へ運ばれた茂さんは、もう戻らない人となってしまいました。茂さんは、転んだ際に頭を強く打ったことが原因だったようです。

余命は春まで、と言われた茂さんが、夏を迎えることができました。そして、その最期は、奥さんが大好きなイチゴを摘んで終わりました。奥さんは、「父さんは幸せでした。私も、父さんが摘んでくれたイチゴを食べることができました。あのね、福ちゃんは、家に来てからずっと、食卓と自分の二階の部屋の往復でね、私たちの居間や父さんの部屋に出入りすることはなかったんですよ。なんとなく、福ちゃんをよそ様に見られることを避けていたのかもしれませんが。今になっては、福ちゃんには申し訳ない思いもありますよ。それがね、最後はこうやって、本当の親子みたいに、一

緒にお風呂に入り、朝も晩も、父さんが歩くときには、福ちゃんが傍にいてくれた。本当の子供の世話になっているみたいで、気が楽だ、と何度も父さんは言っていました。福ちゃんを預かってよかったとも言っていました。ケアマネジャーさんは、心配してくれてよく相談に乗ってくれましたけどね、やっぱり、自分たちの生活は自分たちでできるって案外大事だと思うんですよ。よそ様のお世話になるのも、ゆるくない。周りの人はどう思ったかわかりませんが、私は、父さんは幸せに天国へ行ったと思っています。」チョさんは、涙をこぼしながら満足げに語ってくれました。

茂さんの亡くなったあとの福ちゃんは、あの頃と同じように、茂さんの知人の工場を手伝いに毎朝でかけて夕方帰ってきます。そして、玄関から自分の二階の部屋へ直行する習慣はなくなり、帰宅すると、必ず茂さんの遺影に「ただいま」と声をかけて食卓に座るのでした。

茂さんが自宅で最期の時を迎えるまでの数カ月は、病状が不安定な日々でした。それでも、病院でもなくサービスを利用するのでもなく、長く時間を共にした家族と一緒に生活することを望んで、その願いが叶ったように思います。ケアマネジャーが介護保険サービスを使ってできることなど、高が知れている。長く続いている、共有する時間の持つ大きな力を感じた、茂さん家族の物語でした。

\*プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。